

発表題目:否定的真理の問題に対するマンフォードの解決策への反論

本発表では、否定的真理の問題を扱う。

問題の例を挙げよう。例えば、「この部屋にカバはいない」という否定的内容をもつ命題を考える。この命題が真だとする。このとき、この命題を真にするものは何か。

この問題について、現在の議論の基礎となったのはモルナーの論文である。問題は以下の四つの前提から引き起こされる(Molnar 2000)。

- (i)世界は存在するすべてである。
- (ii)存在するすべては肯定的である。
- (iii)世界についてのある否定的主張は真である。
- (iv)世界についてのすべての真な主張は、存在するあるものによって真にされる。

これらはどれも直観的には正しい。だが、(ii)-(iv)を合わせると、否定的主張が肯定的存在者によって真にされる、ということになる。肯定的存在者の例としては、このカバが4mであるという肯定的事実、などがある。このような存在者が「この部屋にカバはいない」などの否定的主張を真にするというのは、直観に合わない。

この反直観的結論ではなく、否定的主張は存在しないものによって真にされる、という結論が出るように(iv)を修正したとしよう。しかしこの場合は、(i)より、世界についての主張が世界によって真にされない、という反直観的結論を招く。これが否定的真理の問題である。

否定的真理の問題は、分析形而上学で扱われるtruthmakerに関わる。truthmakerとは、命題を真にする存在者である。たとえば、このカバが4mであるという事実は、「このカバは4mである」という命題を真にする。このとき、この事実という存在者を、この命題のtruthmakerと呼ぶ。

truthmakerについて、次の三つの立場がある。すなわち、すべての真理がtruthmakerを持つと考える全面主義、ある真理だけがtruthmakerを持つと考える非全面主義、真理がtruthmakerを持つことを拒否する虚無主義の三つである。

前提(iv)は、世界についてのすべての真理が、truthmakerを持つという主張と同値である。全面主義を採るなら、(iv)も維持しなければならない。拒否するならば、非全面主義となる。また、虚無主義を採るなら、(iv)も拒否される。このように、否定的真理の問題

は、**truthmaker**についてどの立場を採るかということに大きく関わる。

本発表では、まず、否定的真理の問題を紹介する。次に、**truthmaker**と問題との関係を確認する。そして、問題解決の選択肢を整理する。その上で、非全面主義を批判した先行研究を紹介する。最後に、マンフォードの解決策に反論を加える。マンフォードは、(iv)を維持して前提 (iii)を拒否し、否定的真理はすべて偽装された肯定的虚偽であると主張する。しかし、これには非全面主義への反論と同様の反論が当てはまることを示す。